



入学試験問題
国語

函館ラ・サール高等学校
2021年2月16日

〔問題一〕 次の【Ⅰ】【Ⅱ】は、落語家の立川談慶による文章である。これらを読んで後の問いに答えなさい。

【Ⅰ】

自民党の新総裁、つまりは新首相が菅義偉さんに決まりました。

仕方ないとはいえ、やはり昔ながらの自民党の派閥主体の選出方法には、令和にもなった現在、がっかり感しかありません。安倍さんが辞任を表明した途端に内閣支持率が一気に上昇したことに鑑みると、菅さんもすぐに退陣すればさらに支持率がアップするのではと芸人として無責任に思った次第であります。

もしかしたら、日本人は「マジリテイ側」に黙ってついて行くのが好きな国民なのかもしれません。「A」大樹の陰」ということが昔から言い伝えられているのは、この国に住む人たちが変わっていないことを意味しています。たとえば大樹が「小樹」になり果てているはずの落ちぶれた組織であっても、①その姿勢は変わらないのでしよう。

「同調圧力」というと外部からの強制的な力で、他人と同じ^a歩調を要求されるようなイメージがありますが、そうではなく、むしろ日本人は「人と合わせることそれ自体」が好きなのかもしれません。

あれほど改善しなければと言われ続けながらも、いまだに「新卒一括採用」は幅を利かせています。これを重視している企業もそして取り巻く環境も、やはり「みんなと同じ歩調を好むこと」を第「B」義に置いているからでしょう。

仲良くさせていただいているお笑い芸人・ウーマンラッシュアワーの村本大輔さんから、以前「揃いのリクルートスーツに身を包んだ新入社員の集合写真と大量生産の多数のネジの写真」が同時に送られてきて②大笑いしたことがありましたが、まさにまったく同一に見えたものです。

無論、大企業に入ろうとすること自体を揶揄しているわけではありません。その社会的な貢献度は素直に認めたいと思いますし、働きたくなる理由も「実際レベルの高い社員は大勢いるから」とか「育てる力が備わっているから」などとたくさんあるのは「C」も承知です。ただ、そこを通過しようとする際の「自然とみな同じ^{たまたま}佇まいになってしまいう日本人ならではの気風」の中に「同調圧力」の匂いを感じるのです。

ことにこのコロナ禍はさらに日本人の「同調圧力好き」を露呈させました。

マスク警察、自粛警察などは、「人と足並みが一瞬でもズレている人に対する嫌悪感」の表れです。未知の疫病がもたらした^b未曾有の不況がそれを増幅させています。

ここで、翻って考えてみました。

仮説ですが、「日本人の同調圧力好き体質」が「落語」を産んだのではないかと。

落語は、下半身の動きを制御した特殊な芸能です。しかもそのストーリーは、状況説明をほぼカットしたかたちの会話のみで、進

行します。

観客は、「ああ、登場人物は若い女性だな」「ああ、いま酒を飲んでるな」などと、演者の口調と上半身の手振りのみで想像することに「同調」します。観客には非常に負担を要求する「同調」ではありませんが、その総和は気持ちのいい「圧力」となって会場全体に夢のようなひとときをもたらします。

これはもちろん苦痛ではない「同調圧力」ですので、「マスク警察」などとは違った、「^③いいほうの同調圧力」なのかもしれません。考えてみたら、近著の『安政五年、江戸。パンデミック。』にも書きましたが、安政の大地震などの災害、黒船来襲などの外圧の中で、うまい具合にやり過ごすことができたのは、あらゆるストレスを分散するかのよう機能した長屋のコミュニケーションという「同調圧力」でもありました。

そして特筆すべきは、そんな過酷な環境の最中、安政年間に江戸で寄席の数が百七十以上に増加したことでした。国難を「^④いほうの同調圧力」で乗り越えたという見本がこの国なのです。

「たがや」という落語があります。

「たが」とは桶おけの外枠をはめる竹や金属の輪のことで、次のようなあらすじになっています。

隅田川の川開きの当日、両国橋の周辺は花火見物の人ばかりでまさにすし詰め状態。その混雑の中をかき分けて、馬に乗り供を連れた侍一行が通りかかった。すると反対側からは、たが屋が道具箱を担いでやって来る。

たが屋はあちこちから押され、そのはずみで持っていた「たが」が外れて馬上の侍の笠かさを弾き飛ばしてしまった。たが屋はひたすら謝罪するが、侍一行は一向に許さない。ここでたが屋が開き直り激昂げききょうする。

「たった一人のたが屋対侍一行」という図式に観衆は大盛り上がり。たが屋が刀を奪って共侍を切りつけると、観衆はさらにたが屋に加勢する。家来をやられた馬上の侍が下りてきて一対一になるとさらにヒートアップ。中間ちゆうげんから受け取った槍やりをぴたつと構える主の侍に対して、勢いのあるたが屋はやはり優勢で、横一線にスパッと刀をはらうと、侍の首が中天にピューっと飛んだ。それを見ていた観衆は思わず……「上がった上がった上がった上がった！ たが屋く！」

真夏に頻繁に演じられる名作で、それぞれの落語家がオリジナルのくすぐりで光らせることのできる嘶なげでもあります。師匠の談志はこの結末部分を、それまで優勢だった「たが屋」の首が侍によってハネられ、それでも観衆が「たが屋く！」と叫んだというオチに変えています。

最初は判官顛はんがんびい頂ぎで弱いものの味方という風情で「たが屋たが屋」などと声援を送ってはいるが、たが屋のクビがハネられてしまうような悲惨な結末を迎えたとしても「たが屋く！」と叫ぶ……つまり談志は「大衆の無責任」をテーマに据えたのです。そん

な「いい加減さこそが大衆」なんだと、より深いテーマの落語に仕上げたのです。

さて、ここで日本人の「同調圧力好き」と「たがや」を掛け合わせてみます。

すると、「同調圧力を振りかざしてくる大衆の実体なんて得てしてそんなものなんだよ」という深淵しんえんなる真理が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

さらにいえば、「同調圧力」に対する姿勢が学べるはずです。世間が主張する「世論」なんかもこの類いでしょう。「談志版たがや」で「同調圧力」に対する距離を学べば、目に見えない世論や同調圧力などでも可視化されるような気さえします。

「完全に賛同すべきではないけれども、無視すべきほどでもない」みたいな「同調圧力の実体」が感覚としてつかめるのではないかと、ひそかに信じています。

落語という世界に誇るべき文化を産んだのも「同調圧力」ならば、日本人を同質化・均質化させ、その⑤シフトチェンジを阻んでいけるのも「同調圧力」なのであります。

(一) 【I】の 〓 線部 a 「歩調」、 b 「未曾有」、【II】の c 「遵守」、 d 「亡者」の読みをひらがなで答えなさい。

(二) に入る言葉を答えなさい。

(三) 、 に入る漢字をそれぞれ答えなさい。

(四) 〓 線部① 「その姿勢」とありますが、「その」の指示する内容を【I】から二十字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出しなさい。ただし、句読点・記号も字数に含めます。

(五) 〓 線部② 「大笑いした」とありますが、その理由を説明した次の文の にあてはまる漢字一字を答え、〓 線部 ii を漢字に直しなさい。ただし、 には「無」「不」「非」は入らないものとします。

新入社員たちの 個性な様子が、同じ キカクで大量生産される工業製品にそっくりだったから。

(六) — 線部③ 「いいほうの同調圧力」とありますが、この「同調圧力」はどのような働きをするのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 会場の観客が、嘶の内容をよく知る常連客の反応に合わせているうちに、落語という芸能を理解していく。
- イ 会場の観客が、演者の身振り口振りによって、現実とはかけ離れた異空間に同化できるよう導かれていく。
- ウ 会場の観客が演者の語りに引き込まれ、一緒になって笑ったり泣いたりする時間を共有できるようになる。
- エ 会場の観客がそれぞれに異なる情景を思い浮かべていたとしても、空間を共にしているだけで楽しめる。

(七) — 線部④ 「いいほうの同調圧力」とありますが、こちらの「同調圧力」の働きの説明として最も適当な部分を、句読点などを含めずに十字以内で【I】から抜き出しなさい。

(八) — 線部⑤ 「シフトチェンジ」とありますが、これとほぼ同じ意味を表している外来語を、次の【II】から抜き出しなさい。

【II】

- (1) コロナ後は一体どうなるのでしょうか？ 口々に「V字回復」という言葉が使われる方がいますが、私は違和感しか覚えません。だって、V字回復ということは、「いまのこの新型コロナウイルスの渦中がマイナスだ」と意識していることですよねえ？
- (2) 本当にマイナスなのでしょうか？ そりゃ金額的にはマイナスでした。この数カ月で落語と講演の仕事の八割は飛んでしまいました。
- (3) しかし、今みなさんが読んでいるこの本は、ほぼ新型コロナウイルスによる緊急事態宣言中に書き上げたものです。つまり読者の皆様との出会いは新型コロナのおかげなのです。
- (4) きつとコロナ後には、誰もが予測できない世界が展開しているのではないかと思われます。V字回復というより、さなぎが蝶ちょうになるような大きな変化があるのではと思うと、夢や希望しかないのです。

- (5) そのためには、やはり今までの価値観を、変えるというより、アップデートさせなければならぬかもしれません。
- (6) 「新しい生活様式」が取り沙汰されています。具体的な言葉に「ソーシャルディスタンス」があります。これは、「感染症の拡散を停止または減速させることを目的とした感染抑制のための手段」です。それは、人と人との間に物理的な距離を取ることによって人が互いに密接な接触を行う機会を減少させる方策のことを意味し、大きなグループでの集まりを避けることを含みます。例に挙げた「三密」回避の具体化のことでしょう。
- (7) 「他人との距離の取り方」はいつの時代も難しいものでした。それはコミュニケーションそのものだからです。そして、ソーシャルディスタンスを遵守するがあまりに、それが強くなりすぎる形で、またまたマジメ過ぎる日本人らしい言葉も出てきました。それが緊急事態宣言の最中に出てきた「自粛警察」です。
- (8) 特効薬がない疫病との共存は、マスク着用が当然という日常をもたらしましたが、電車内などで少しでも咳き込んだりする人を見ると露骨に嫌悪の眼を向ける「不寛容さ」も同時に招いています。そんな心模様の積み重ねが、「自粛警察」ではないでしょうか。正義の気持ちから、営業し続けているお店を糾弾してしまうのでしょうか。
- (9) つまり、過度な「ソーシャルディスタンス」でカドが立つ結果としての「自粛警察」なのかもしれません。
- (10) では、「人との距離」、どこに理想を求めればよいのでしょうか。
- (11) 答えは「笠碁」にあります。あらすじはこんな感じですよ。

碁の好きな二人、「碁敵は憎さも憎し懐かしし」の言葉通り、毎日、碁を打っている。一人の男が相手の家にやってくる。「今日は一つ待たなして一番やりましょう」「それじゃ」と早速打ち始める。

「では、一つ、二つ、三つ、あ、この石どけてください」「待ったですか」「そつじゃ」「ごいませんですが……どけてもらいませんか」「ダメです」と押し問答。

しまいにはお互いエスカレーターし、昔の借金の話にまで発展し、お互いに「へぼだ」と言い合い、「帰れー!」もう二度と来るか!と喧嘩して帰ってしまつ。

数日たって雨の午後。申し訳ないことをしたなあと思ひ始めた男は、退屈しのぎに笠をかぶって、相手のうちに出掛けていく。一方の相手も、実は言い過ぎたなあと後悔していたところだった、そして笠の男が近づくのを見、碁盤を置いて待っている。

「おい、茶と羊羹出しとくれ。……あ、向こうへ行きやがった。素直に来ればいいのに……だいたいあいつは強情だよ……あー!」

近づいてきたので「やい!」へぼ!と呼びかけると、すぐさま相手も呼応し、「言いやがったな。じゃあ、どっちがへぼか。

勝負だ」と碁盤を間にはさんで「よし、勝負だ」「ようし、やろうじえねえか。待たなして言ったのは、お前さんじゃねえか。……うん、碁盤が濡ぬれているよ。恐ろしく⑥雨あめが漏ぬるなあ……あ、お前さん、笠被りっぱなしだ」

(12) 師匠の師匠、柳家小さん師匠の十八番でした。目力だけで笑ってしまったものでしたっけ。

(13) この嘶この肝は、「徹底的に張り合う割に、またいつの間にか仲良くなって碁を打つ二人の低レベルっぽさ」にあります。翻ひつて、人間関係の理想は「ここにあるのでは」と私は確信しています。お互いいろいろあったけど、根ねっこではどこかつながっている距離感から「落語っていいなあ」としみじみ感じませんか？ それが⑦江戸時代の「ソーシャルディスタンス」だったはずです。

(14) そもそも、相手のことを「他人様ひとさま」と尊称で呼ぶ国なんて他にありませんでしようか？

(15) コロナ禍でも営業しているお店も必死なのです。黙もくついても固定費がかかります。決してお金の^d亡な者ものではありません。一瞬でも向こう側の人に「様さま」を付けて、向こう側からこっち側を見れば、少しでも営業したくなるのは人情だと悟れないでしょうか。

(16) こんな最中に麻雀マージャンをやっている叩たたかれた法の番人がいましたが、実際碁なども表立ってできない時期はまだ続くでしょう。でも、心だけでもこの「笠碁」の距離感に思いを馳はせてみませんか？ 「まず相手を思う」。向こうが強情だということは自分も強情なのです。

(九) 次の形式段落は、もともと【II】の文章中にあったものですが、どの形式段落の前に入りますか。段落番号で答えなさい。

マイナスばかりではありません。本来入ってくるはずだったお金の代わりに、別の世界に遭遇できたのですから。しかも私は他に小説まで書きました。

(十) ——線部⑥「雨」は、あるものの暗喩になっています。これは何を表現したものと考えられますか。簡潔に答えなさい。

(十一) ——線部⑦「江戸時代の『ソーシャルディスタンス』とありますが、ここで述べられているような「距離感」で成り立つ人間関係について、句読点も含めて五十字以内で説明しなさい。

〔問題二〕 次の【Ⅰ】【Ⅱ】の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、【Ⅰ】の最後にある~~~~線部は続く【Ⅱ】の設問に関連します。

【Ⅰ】

中学三年生の本庄みさとは二年生の途中で放送部に入部したが、みさとの他には三年生で部長の古場和人しか部員がおらず、廃部の危機にあった。部員勧誘のために始めた昼の放送をきっかけに、一年生の小島珠子、みさとと同じクラスの新納基が入部した。さらに放送部で活動した経験を持つ転校生、真野葉月がみさとに頼まれ、アドバイザーとして部に加わった。部員たちは放送コンクールへの出場に向けて準備をしていたが、不適切な昼の放送が問題となり、学校内での活動がしばらくの間禁じられたため、校外で練習することになった。

天気がいいので、そろそろと隣接する公園に移動した。みんなでベンチに腰を据え、台本を持って読みあわせの準備をしていると、ふいに葉月が言いだした。

「古場くん。このわたしの割り当てぶん、小島さんに代わってほしいんだけど」

「えっ？」

「始めから言ってたはず。わたしはアナウンスに加わるつもりはないって。うまく書きなおせば登場人物は削れるでしょ」

「——そんな、葉月先輩、わたしそんな長いところ、できません」

「頼むよ、真野さん、もうあんまり時間に余裕が……」

みんなが A するなか、新納が落ちついたようすで尋ねる。

「なんでだよ、真野」

葉月は顔をしかめた。

「部のために協力はする。アドバイザーだもの、手伝えることは手伝うし、教えられることはぜんぶ教える。コンクールの準備も全力で真剣にやる」

でも、とつづける。

「わたしは読まない」

「だからなんで」

「べつに。理由なんてない」

そっぽを向く葉月に、新納はお手上げだという顔でため息をついた。古場が困り果てたようすで台本をめくり、珠子は不安そうにそれを見ている。

葉月は知らん顔で遠くをながめていた。憎らしいくらい整った横顔だった。

「——いいかげんにしてよ」

気がつけばそう口にしてた。

「いつまでそんなこと言ってるの。もう時間がないんでしょ、自分が言ったんじゃない、早く練習して録音しないとだめだって——」

「だから、今それをやってる」

「そうじゃなくて！」

つい責める① ような口調になる。

「ちゃんと参加してよ、部の一員でしょ？」

葉月がじつとみさとを見てきた。その視線に一瞬、たじろぐ。やがて葉月は、約束が違う、と言った。

「あれ、嘘だったの？ 初めからそのつもりだったの？ とりあえず部員が欲しくて、適当なこと言っただけ？ 入ってしまった、わ

たしがそのうち気を変ええると思った？」
痛いところをつかれた。

「だって——だって、ずるいじゃない」

「ずるいっ」

「そうよ。そんなにうまいのにやら② ないなんてずるいじゃない。——だって、だって真野さんは、やっぱり特別なもの。技術だって、知識だって、わたしたちとはぜんぜん違う」

がんばって練習して、ようやく少し自信がついても、あまりにもあつさりとそれを超えてしまうじゃないか。

葉月がまたか、という表情で **X** をすくめるのを見て、頭にかつと血が上った。

「ほら、そうやって自分は関係ないって顔して、いつだって上から見下ろして。——少しは考えてよ、自分よりずつとうまい人の前で、それでもやってなきやならない者の気持ちだが、あんたにわかるの？」

一瞬、葉月の顔がすつと平らになった。

「わからなく」

冷たい声だった。

「わかるわけがない。じゃあ、逆に聞くけど、——そっちこそ、なにがわかっているっていうの」

葉月がぐいとにらみつけてきた。後ろで珠子たちが **A** している。

「ずるい？ できない？ わたしがうまいのと、あなたができないのは関係ないでしょう」

「真野」

「葉月先輩！」

「うまいやつがやれ？ なにそれ」

「ばっかじゃない、と吐き捨てる。」

「だったら、あなたはなんのために放送の大会に出るの。部の存続のため？ 内申のため？ 望みはなに、賞？」

「シツセキ？」

B 「した瞳が、わずかな視線のぶれも許さない強さでまっすぐにみさとの目をとらえてくる。」

「それとも、—— みんなの前で、上手に読む自分？」

どきりとした瞬間、葉月は、くっだらな、と視線をそらした。

「そんなもののためだったら、ひとりでカラオケにでも行つてればいい」

ふいに興味を失つたようにみさとに背を向けると、バサバサと帰りの シタク を始めた。

たった今向けられた言葉が、重い石のように胸に残っていた。

(一) 〓 線部 a 「シツセキ」、b 「シタク」を漢字に直しなさい。

(二) **X** には体の一部を表す漢字一字が入ります。その漢字を答えなさい。

(三) 〓 線部① 「ような」と同じ意味・用法で使われているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼のような頭のよい人になりたい。

イ 噂では春から転校生が来るようだ。

ウ 予報によると午後から雨が降るようだ。

エ 彼女の笑顔はひまわりのようだ。

(四) ——— 線部②「ない」は次のどれに当たりますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 動詞 イ 形容詞 ウ 助動詞 エ 助詞

(五)

A

、

B

に入る語として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはいけません。

- ア さらさら イ きよろきよろ ウ ぎらぎら エ おろおろ オ じろじろ カ こそこそ

【II】

葉月が学校を休みがちになり、みさとは葉月との関係を修復できないままだった。

その日、みさとは部活を休んだ。

編集作業に入った古場たちはともかく、みさとにはもうあまりできることはない。先生に断りを入れ、ひとりで校門をくぐった。曲がり角で立ちどまった。まっすぐ下ればみさとの家、左へ折れば葉月の家がある。少し悩んで、左へ折れた。

葉月のマンションの前で、再びためらう。

—— やっぱり、やめておこうか。

くるりと背を向けたところで、大きな人影にぶつかりそうになった。新納だった。

「—— え。なんでいるの、部活は？」

「そっちこそ」

新納が動かないのでみさとも前に進めない。無理に横を通りぬけようとしたら前をふさがれた。じろりとにらみつけたら ③ 新納はそっぽを向いて知らん顔をしている。

「……覚えてなさいよ」

再び踵^{かかと}を返し、④ やけくそな気持ちでインターフォンを押した。

〈——はい〉

葉月らしい声がする。みさとが名乗ると、しばらく無言がつづいた。

「ちよっと、話ができない？」

みさとが言うのと、ためらう気配のあと、

〈べつに、話すことないから〉

と声が返ってきた。

〈……じゃあ〉

切る気配がしたとき、後ろから新納がぐいと首をつきだしてきた。

「逃げるのか、真野」

みさとの肩ごしにインターフォンに顔を近づけている。

「——さっさと降りてこい、ブス」

ぎよつとして耳を疑うと、ぶつりと乱暴にインターフォンが切れた。ほとんど間を置かずエレベーターが開いて葉月が降りてきた。遠目にも怒っているのがわかる。エントランスのドアが開くなりすごい剣幕^{けんまく}で新納をにらみつけた。新納はとぼけてあらぬほうを向いている。みさとはおろおろとふたりを見くらべた。

「……あの、とりあえず、ほかの場所行かない？」

公園のベンチで、みさととはかばんから*古場にもらったCDを出してみせた。タイトルを見て葉月の表情がわずかに動いたが、なにも言わなかった。

「——これ、聴いてもいい？」

葉月は黙っている。新納はふたりから少し離れた場所に関係なさそうな顔で立っている。

「葉月が嫌なら、聴かない」

これは返す、見なかったことにする、と言うと、葉月はぎゅつとくちびるをかんだ。

「——約束するなら」

硬い声で言う。

「なにを？」

「それを聴いたあと、もうわたしに関わらないって」

そしたら聴いていいよ、と挑むような口調で言った。みさとはいさし考えて答えた。

「無理」

「なんで」

大きな目でぎろりとにらみつけてくる。ああそうだ。これが葉月だ。

「やっぱり好きだもん、葉月のこと」

葉月の瞳が大きく揺れた。

言おうと思ったことはいろいろあった。昨夜ゆうべからずっと考えていて、けれど口から出てきたのはこの言葉だった。

「好きだよ」

⑤ 葉月はばつとすごい勢いで背中を向けた。そのまま動かない。

遠くで夕方のメロディが鳴りはじめた。『七つの子』だ。葉月はまだ向こうを向いている。

「……泣かないでよ」

「泣いてない」

再びばつとふり向きかみつくように言う。よけいなこと言わないでよばか、と言って、今度こそ本当に泣いた。新納があきれた顔でこつちを見ている。

それからふたりでいろいろな話をした。

ようやく葉月が勢いよく涙はなをかけたころ、あたりはすっかり夕焼けに彩られていた。

その夜、家族がみんな寝静まったころ、みさとは古場にもらったCDをそっとデッキに滑りこませた。イヤフォンをして再生ボタンを押し、ベッドの上で壁に背中をもたせかけた。静かに再生が始まる。

会場内のざわめきや拍手から始まるそれを、みさとは早送りせず順に聴いていった。目を閉じ、会場のようすを思いうかべながら耳を澄ます。まんなかあたりで葉月の学校の作品が流れてきた。

タイトルは、『学校へ来られないあなたへ』だった。

幼馴染おきななじみだったのだ、と葉月は言った。

おとなしくてひっこみ思案で、優しくていつもにこにこしている子だったと。だから正義感が強く勝ち気な葉月は、いつも保護者のような役割だったのだという。

その彼女が、小学校の高学年になったあたりから学校を休むようになった。

いろいろな事情があったのだと思う。理由はひとつではないだろう。その後べつべつの中学校へ進むと、ますます欠席が増えていったらしい。自分の学校生活を楽しみながら、それでも葉月は常に彼女のことを気にかけていた。ときおり、メールで自分の近況や学校の

ことなどを報告したが、返事は間遠になつていった。

二年生に上がるころにはその子はほとんど家から出なくなつていた。放送部で活躍していた葉月は、だからその年のコンクールの話が出たとき、まつさきにそのテーマを思いついたのだという。学校に来られない子たちを励ましたい、その思いで生徒や先生の声を集め、専門家に話を聞きに行つた。ひとつの作品にまとめ、できあがつたそれを持って葉月はその子を訪ねた。

「——喜んでもらえると、あのときは、本気で信じてたんだよ」

ばかだよねえ、と葉月は言った。不登校の友人から返つてきた言葉は、

「死ね、消えろ、あんたなんか二度と来るな」

だった。だれかにそんな目で見られたのは葉月にとつて生まれて初めてのことだった。

「わたしの気持ちがあんたにわかるの？　お願いだから消えて。どっか行つて」

目の前でドアを閉じられた。気の強い葉月のことだ、始めは怒りで震えたのだという。なんだあの態度は、と怒りまくつて、何日も眠れないくらい考えて、ただ自分が正しいことを証明したくて、さまざまな資料を集めむさぼるように読んだ。そこで初めて気がついた。

あの作品は、ちつとも彼女のほうを向いていなかった。

「最初から見下してたんだよ。自分のいる場所が正しくて、あの子は正しくないって。だからこっち側へ戻れるよう助けてあげなくちゃ、って」

気づいたときにははずかしさで死にそうになった。⑥ わたしはなんにも見えていなかった、と葉月はうつむいた。

作品の出品を取り消したいと部員や顧問に訴えたが、認められなかった。葉月ひとりの作品ではなくみんなで協力して作ったものだったからだ。いい作品じゃないか、と顧問の先生は言った。

なんで。なんでみんなわからないの。

最後までさんさんごねて、おかげで葉月は部内でももてあまされるようになっていった——。

「知らなかったの？　あんたのそばにいて嬉しかったことなんか一度もない」

憎しみに満ちた目でそう言われた。

「これ以上わたしを、あんたの手柄のための材料にしないで」

彼女は絞りだすようにそうも言った。

地区大会のあと葉月は放送部をやめた。自分自身あまり学校に足が向かなくなり、やがて周囲に勧められて、この春、転校した。

「……ごめん。これでわたしがアドバイザーなんて、ほんと、笑っちゃうよね」
公園のベンチに座った葉月は、最後にそう言ってひっそりと笑った。

静かな夜だった。イヤフォンを通して耳に流れこんでくる葉月の声が、みさとの内側を震わせながら深いところへ落ちていく。あまり抑揚をつけず淡々と読んでいるのに、胸が痛くなった。

無口できれいで、だれともつるまない葉月。

すべてを聴きおえ音が止まった。みさとはCDを取りだすと、きちんとケースに収めて机の引きだしの奥にしまった。

⑦ 明日、アナウンス原稿の録音をもう一度やりなおそうと思いついた。眠りについたら、夢のなかで、みさとはさしのべられただれかの手に自分の手を重ねていた。

（市川朔久子『ABC！ 曙第二中学校放送部』より）

*「古場にもらったCD」—— 去年の放送コンクールの地区大会の録音CDで、真野葉月の朗読が入っていた。

(六) —— 線部③ 「新納はそっぽを向いて知らん顔をしている」とありますが、ここから読み取れる新納の態度として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 葉月との関係をみさと自身に解決させようと、逃げようとしているみさととの訴えに取り合わないようになっている。
イ 自分ではうまく葉月を説得できそうもないので、自分の代わりにみさとから話をしてもらおうとしている。
ウ このままでは思い通りに部活を休むことができなくなるので、なんとか葉月たちを仲直りさせようとしている。
エ みさとの身勝手さを自覚させようとして、どんなに怒らせることになっても完全に無視しようとしている。

(七) —— 線部④ 「やけくそな気持ち」とありますが、ここから読み取れるみさとの気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仕方がないから新納の気持ちをくんで葉月と話し、この場をなんとかおさめようという気持ち。
イ 強引に誘えば、もしかしたら葉月がアナウンスを引き受けてくれるかもしれないという気持ち。
ウ 結果がどうなるうとも、もはや思い切って自分の正直な思いをぶつけるしかないという気持ち。
エ 新納に姿を見られた以上は、恥ずかしいのをこらえてきちんと謝罪するしかないという気持ち。

(八) —— 線部⑤ 「葉月はぼつとすごい勢いで背中を向けた」とありますが、ここから読み取れる葉月の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恥ずかしさと悲しさ イ 悔しさと腹立たしさ ウ 悲しさと悔しさ エ うれしさと恥ずかしさ

(九) —— 線部⑥ 「わたしはなんにも見えていなかった」とありますが、この説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 全員で取材をして作ったのに、自分の思いこみだけが目立つ作品になってしまったとわかり、他の部員への配慮が足りなかったことを後悔したということ。
イ 自分の作った作品が幼馴染みの友人の助けになると安易に考えていたが、それは独りよがりのものであるとわかり、自分を情け

なく思ったということ。

ウ 専門家の意見を聞いて作り上げた作品であったが、もっと多くの人からも話を聞けばよかったと思ひ、幼馴染みの友人に申し訳なくなつたということ。

エ 幼馴染みの友人から話を聞かないまま作品を作ってしまったが、読み返してみると実際とはかけ離れた話になつてしまい、自分でもあきれたということ。

(十) 次の文章は——線部⑦「明日、アナウンス原稿を眠りについた」について教師と生徒が交わした授業中の会話です。これについて後の問いに答えなさい。

教師 【II】で葉月は過去のことをみさとに話します。【I】の最後のほうを読んでください。Aの直前に「わかるわけがない」と葉月は言っています。これはもちろん「みさとが葉月のことを分かるわけがない」という意味ですが、実はここに葉

月とみさとの共通点があります。【II】の葉月の発言を踏まえて考えてみてください。

生徒 うくん。葉月の過去のことが関わる、葉月とみさとの共通点ですか。それは、自分では（i）と違ってやったことが、実は相手にとつてはそうではなかった、ということでしょうか。

教師 よくできました。葉月はこの過去の件では結局のところ、みんなから（ii）になりました。そういう経験があつたからこそ、葉月はかたくなに原稿を読むことを断つたのです。

生徒 でも、【I】の時点ではみさとには分からなかったわけですよ。なるほど、だから~~~~線部のように、疑問は「胸に残っていた」という表現になっているんですね。

教師 そうなんです。そしてその疑問は葉月の過去のことを聞いて、みさとにはやっと理解できたのです。

生徒 なるほど。でも、疑問が解けたことと、——線部⑦「明日、アナウンス原稿を眠りについた」の関係性がよく分かりませぬ。なぜ葉月の疑問が解けた結果、みさととはもう一度がんばろうと思つたのですか。

教師 【II】で、葉月が話した内容をよく読んでください。——線部⑥「わたしはなんにも見えていなかった」と葉月はみさとに言っているわけですが、ここにも葉月とみさとの共通点があります。みさと自身にも葉月と同じように「見えていなかった」部分がありますよね。その結果、みさとが葉月にしてしまったことはなんだと思ひますか。

生徒 （iii）ということでしょうか。

教師 そうですね。葉月の思ひを理解できたことによつて、みさととは自分自身のことを振り返り、そして自分も葉月と同じような間違いを繰り返そうとしていたと理解できたのでしょうか。だから、まずは自分の力でもう一度がんばろうと思ひ直した、ここはそういう場面なのです。

生徒 よく分かりました。ありがとうございました。

問 1 (i) に入る語を、三字で答えなさい。

問 2 (ii) に入る表現を、【Ⅱ】から十字で抜き出さなさい。句読点も字数に含めます。次の問題も同様です。

問 3 (iii) に入る言葉を、六十字以内で答えなさい。